

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録, 日本—フィリピンの違いと知財雑感
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 115, No. 6, pp. 30-31
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 115, No. 6, pp. 30-31
発行日 / Pub. date	2018, 6



知財見聞録

日本—フィリピンの違いと知財雑感

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

フィリピンにMy Best Friend の弁護士がいる。カタコトながら日本語の日常会話ができ、日本にも友人の多い親日家の女性である。

日本とフィリピンの共通点は、島国であるということ。しかしながら海に囲まれた環境は同じであっても、文化、社会、宗教、生活環境等は大きく異なる。

日本とフィリピンの違い

日本とフィリピンの相違について議論してみると、第一に宗教の違いが指摘される。フィリピン人は大半がカトリック信者であり、街中には教会が多い。また教会から離れた場所であっても簡易テント式のお祈りができるような施設があちこちに設けられている。強い宗教観を持ち毎日お祈りをするフィリピン人は、日本人の宗教観に物足りなさを感じるらしい。

そもそも中国等を経由して日本に伝来した大乘仏教では、自らの修行やお祈りというよりは、お寺の和尚さんが説教をして手を差し伸べ、導いてくれることで人は救われる。日本人で毎日

お祈りをするという人は少ないと思う。

日本独自の宗教といえば、多くの人々に神道の世界観が浸透している。神道においては、山や川などの自然や自然現象、また神話に残る神などを敬い、それらに存する「やおよろずの神」が人々の心を支えてくれる。しかしこれは、フィリピンの敬虔なカトリック信者から見ると、日本人は何を生きる価値としているのかと不思議に思うようだ。

多くの日本人ビジネスマンが、マニラやセブに駐在している。彼らが現地で感じることを尋ねてみると、女性社会であるために管理職レベルで働く女性が多い点を挙げてくる。日本でもだいたい改善されてきたが、相変わらず管理職は男性中心の場合が多い。

国際文化比較論で著名なGeert Hofstedeによる統計データを見ても、日本は男性社会であるのに対してフィリピンは女性社会とされる。女性社会では、男女の仕事の違いがなく、男女が共同作業により同じ仕事を共有し、物質的な豊かさよりも心の豊かさを大

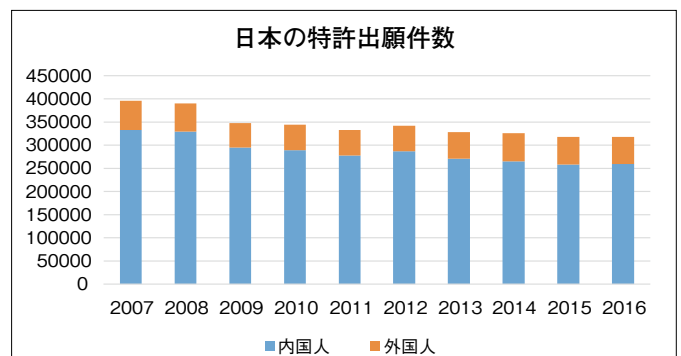
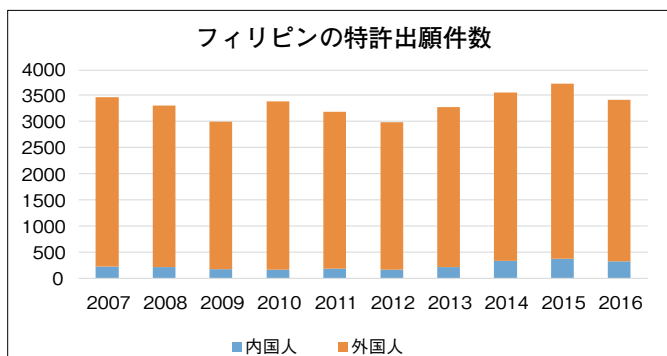
切にする傾向があると説明される。

しばらく駐在員と一緒に話していると、その他にも多くの違いに気付く。地理的には、フィリピンは東南アジアのなかでは最も日本に近い国でもあるが、彼らはさまざまなことで苦勞が尽きないようだ。国境を超えたコミュニケーションと相互理解というのは実に難しいものである。

特許出願件数の一考察

知的財産関係にも顕著な違いが存在する。下図を比較すれば一目瞭然である。フィリピンでは、自国出願（内国人による出願）が1割以下であるのに対して、日本では自国出願が8割以上であり、全く逆の状況が続いている。両国を取り巻く知的財産権分野の違いはさまざまな視点から比較研究できるが、社会経済の違いから何かいえることはないかと思い、世界銀行のデータと特許出願件数の関連を分析してみた。

フィリピンの自国出願件数が少ない要因として浮かび上がってきた点は、GDPに占める製造業の果たす付加価



値がなかなか増加しないということである。どうしたら自国産業における付加価値を増加させることができるかがカギになっているといえる。

海外出願人の特許出願が多いことをポジティブに考えると、特許公報に記載されている技術情報から知識を抽出して自国産業界で活用していくことが挙げられるだろう。

また、海外からの特許出願が多くその技術が適切に保護される国においては、製造拠点の整備を含めて海外からの投資を誘引する。さらに、その国への海外からの製品輸出が増加し、国内に技術知識がスピルオーバーする機会が増えるだろう。その結果として、自国でのイノベーションが進めば、製造業の果たす付加価値が増加し、自国からの特許出願が必然的に増えてくるのではないだろうか。

大自然に神が宿る

今回は友人に誘われ、マニラから飛行機で1時間弱南西方向に飛び、青く透き通る海に囲まれたパラワン島にあ

る世界遺産プエルト・プリンセサ地底河川国立公園を訪問してきた。英語の通称は、Puerto Princesa Underground River。初めて聞いた時、筆者には意味が分からず、“Underground River?”と首をかしげてしまった。

この地底河川は、パラワン島の山の地下の鍾乳洞内を流れ、南シナ海にそそぐ。約8キロもの長さを有し、地底河川としては世界最長といわれている。地下の真っ暗な洞窟に流れ込んでおり、ボートでその一部分を遊覧することができる。1912年にこの洞窟が発見され、1999年に世界自然遺産に登録されている。地底河川がどうやってできたかは不明であるが、日本流に考えるならば、そこに神聖な神が宿っているということになるのだろうか。

悲惨な爪痕

フィリピンは1529年以降の約370年間にスペインの植民地時代、その後は1898年に勃発した米西戦争で勝利した米国による統治が行われた。第二次世界大戦が始まると日本軍は南方作戦

の一環として1941年にフィリピンへ上陸する。第二次世界大戦後期には、フィリピン奪回を目指す連合国軍と、防衛する日本軍との間で激しい戦闘が行われるが、その爪痕の一つが、プエルト・プリンセサに残されている。

1944年12月、なんと日本軍は防空壕に入った米国人捕虜にガソリンを付けて火を放っており、その場所に記念碑が立っていた。

“Plaza Cuartel

On this site, once a military base during the second world war, some 150 American prisoners of war were burned to death by Japanese soldiers, 14 December 1944, ……”

敬虔なカトリック信者の胸の内

日本とフィリピンの違いから戦争の爪痕にまで及ぶ多くの学びを得られたフィリピン。神に愛と尊敬の念を示し毎日教会で礼拝する敬虔なカトリック信者が多いフィリピン人の想いを少しでも共有できたら素晴らしいと思う旅であった。



ボートで地底河川遊覧へ



地底河川の入り口